

みのお市民人権フォーラム 27th 全体会講演概要
「人と人との豊かなつながり」

～無縁社会の現場からコミュニティのあり方を見つめる～ 講師／板垣淑子さん(NHKプロデューサー)

●導入

日常的には NHK で朝4時半から、連ドラが始まる 8 時までのニュース番組「おはよう日本」を、また特集番組として、「クローズアップ現代」や「NHK スペシャル」も制作している。

今日は、「無縁社会」の番組に関連して、ずっとつながりを絶たれて孤立する人の話をとすることで、このテーマで一緒に考える時間を与えていただき、非常にうれしく思う。

無縁社会のプロジェクトは 2010 年なので、東日本大震災よりも1年以上前に放送を開始している。東日本大震災を挟んで、今も取材を続けている。あの震災の時に、絆やつながりの大切さが訴えられ、「絆」「つながり」と日本中がその方向を目指し、無縁社会は解決するのではと私の周囲で囁く人があったくらい。しかし、2年半近い間に無縁社会が解決に向かっているかという、全然そういうことはなく、深刻化、悪化の方向。あの震災で、それまでにつながりを持っていた人たちは、その大切さに気づきつながりを強めたが、もともとつながりが弱かった人、つながりを持っていなかった人は、より孤立化を深めたように思える。そういうわけで、無縁社会について今も取材を続けている。東日本大震災以降、その無縁社会を肌で感じているからこそ思うことがある。

文具メーカーを取材すると、今、「エンディングノート」が、とても売れている(自分が亡くなった後に「〇〇に知らせて欲しい」とかお葬式の場所やお骨の納め場所などを生前に書き残す、ある種の遺言のようなもの)。そのエンディングノートを書き記し、自分の死に方を、真剣に考える人が増えてきた。大手の文具メーカーが、「自分が亡くなる時、最後に誰といたいですか」というアンケート調査をしたら、それに答えられた人は2割未満で、多くの人は「そうしてみないとわからない」ということだった。自分の老後に孤立が待っていて、「もしかして独りで亡くなるのでは」という、不安を漠然と抱えている人が増えているのではと感じている。今日は、無縁社会の中でコミュニティがどういった役割を果たすのかをお話したい。

●3つの縁

無縁社会を考えるときに、どんな縁があるのかで、3つの縁を想定した。

ひとつは、「血縁」で、家族や親族。10～20 年の瞬く間に、薄れている。長いスパンで、家制度から個人が自由に生きるようになり、親との同居がなくなり核家族化が進むという、1つ大きな時代の変化がある。短いスパン、この 10 年の変化では、「結婚しない人」「一生独身」というライフスタイルを選ぶ人が非常に増えている。更に熟年離婚、高齢者の入り口の 40、50 代での離婚が急増。子どもを持たない家庭も急増している。1人でずっと過ごす人もいますし、伴侶がいてもお子さんがおられないと、伴侶に先立たれると晩年はひとり。高齢者になってから1人、という人が急激に増えている。統計的に言うと、今年になって 65 歳上の独身の方がついに 500 万人を突破。1人で暮らして元気な人が、いざ「ヘルプが必要」、「施設に入りたい」という時に、制度が整っていないので歪みが生じている。

次に、「地縁」の問題。この会を主催する方と話していて、箕面市でも自治会の組織率が減っていて、自治会に入る割合が少なくなっていると聞いた。私の周囲でも、町内会や子ども会が

形骸化している。地域の活動に何も参加していない人が増えているように思う。都市型の転勤構造の中で、引っ越しが3～4回の人が増えている。地縁社会の崩壊が、この20年で起こっているように思う。

最後に、日本的な縁として重視されていたのが、仕事との縁、「社縁」。これは、非正規労働の増加が原因。最後の終身雇用世代が退職の時代を迎えている。地縁もない中、仕事との縁を失い、高齢社会で老後の自分の生活と向き合わないといけないということも起きている。これら3つの縁を失う人が、この10年の間に、急増している。

●番組DVD上映(約25分)

その中で何が起きているのかを「無縁社会」の番組で追求して来た。その番組の中で、1回目に放送した2010年1月30日の番組をDVDをご覧いただきたい。具体的に1人暮らしで頼る人がいない人がどういうことに不安を抱えているのか、また、無縁社会のイメージを持ちにくい方もおられると思うので、1回目の番組の1部分を見ていただき、お話をしたいと思う。

(DVD上映)

これは、2010年1月30日に放送された、「無縁社会～無縁死、3万2千人の衝撃～」1時間の番組の中盤20分ほどの部分。無縁死が3万2千人に達しているという調査報告からスタートした。無縁死について……。最初は孤立死を数えようと思ったが、自治体にも国にもデータが存在しないことがわかった。たった1人で誰にも見送られずに亡くなる人、亡くなった後に引き取られる方を除いて自治体によって火葬・埋葬をされる人の数は、自治体でその費用を予算執行件数として残しているの、これなら数えられると思い、無縁死として調査した。2008年度の数が、年間で3万2千人。毎年、倍々で増えている。遺体になって引き取られない人はどういう人かを調べた。

生涯未婚、結婚をせずに両親や兄弟を見送って天涯孤独の人もいれば、ご家族がいても遠く離れていて、お互いに余裕のない生活をしており、遺体や遺骨を引きとれない人もいる。いろいろな事情で3万2千人の無縁死は増え続けるかもしれない、そんな番組。

今、見ていただいたのは3つの例。前半の2つの例は、無縁死に繋がる人は実際に晩年どう過ごしているのか取材をしていく中で、家族を持たない人がNPOで生前契約をする窓口に殺到していることがわかる。そのNPOを取材して、会員の中から2人紹介していただいた。三菱銀行の男性と、看護師をしていた女性の2人。このNPOは「きずなの会」という全国組織のNPOで、名古屋に本部がある。当時は千単位で、今は万単位で会員を伸ばし続けている。各地で契約会をしているが、本部の契約会を取材したところ、雑居ビルのワンフロアを貸しきっていた。エレベーターを降りたところから長蛇の列で、次から次に契約者が訪れている光景を目の当たりにした。このNPOは番組の中では、ショックもあるかとお話できなかったが、ここに死後の埋葬・火葬をお願いする費用は、最低のパック、火葬と埋葬と遺品整理で180万円。

お葬式をすると、プラス10万円とか介護をプラスするとプラスいくらとか、オプション価格がいっぱい設定されている。400～500万円の契約がポンポン成立することに違和感を覚えた。贅沢をしているような方ではなく、真面目に生きてきた方々が、おそらく貯金を取り崩して契約を結んでいるんだろうな、と思ったが、そこまでして縁をお金で買わなければならない時代ということに、もやもやしたものを感じて取材をしていた。

●「人様に迷惑をかけたくない」無縁社会

その NPO「きずなの会」で、お話を聞かせていただいたら、皆、同じことを契約後に言っておられた。「これで、人様に迷惑をかけずにすむ」どなたに聞いてもこの言葉。お子さんのいる方も、「これで子供に迷惑をかけなくて済む」と言っておられた。私は、「無縁社会」の番組の中で「迷惑をかけたくない」という言葉を、耳にたこができるくらい聞いた。私自身も「人様に迷惑をかけるなど教えられていたし、日本人の美德であると信じてきたが、この取材を通じて「迷惑をかけたくない」という言葉を本当に嫌いになるほど聞かされ続けた。「これまで立派に社会のために尽くして、仕事を続けてきて、晩年少しぐらい迷惑をかけてもいいじゃないか」と思えるような人がこの言葉をおっしゃることに、また、それをなんと社会が救えないことに、毎回、聞く度に忸怩たる思いだった。何度番組を続けても変えられない現状に、それをおっしゃる方に頭を下げるような思いでその言葉を聞いた。「迷惑をかけたくない」と歯を食いしばっている方々を取材で何度も見てきて、みなさんそうだが、迷惑をかけたくないあまりに、ずっと我慢する。自分の置かれている状況や、体調不良や、経済的に厳しいなど、ずっとずっと我慢する。SOS が発せない状態になってから発見されたり、時すでに遅しで亡くなってから発見されたりするケースが増えているのがこの無縁社会。迷惑を掛けたくない SOS を発さないし、発せなくなったらしか周囲が気付かない。このことを、取材を通じてつくづく感じた。

2人目に紹介した看護師の女性は、当時は 79 歳、今は 80 歳ですが、今もお付き合いをさせてもらっている。天涯孤独だが、「迷惑を掛けたくない」と言って、社会の壁にまたぶつかっている。彼女は NPO にも契約されて、火葬・埋葬・お骨の全てを契約され、死後の準備をされている。それでも、自分が何かあったときに電話ができなくて孤独死して、自分が腐乱遺体になって周囲の人に迷惑を掛けるという恐怖で、「1人暮らしは自由だけど、不自由でも老人ホームに入らないといけないと決意し、数ヶ月前から高齢者福祉施設を探し始めている。彼女は看護師を定年以上までして、助産師の資格も持って、ずっと働いていた。しかし、お母さんの介護がありパートタイマーで働いていたので、年金額は月額6万8千円。貯金をはたいてマンションを買ったので十分な預貯金もないから、できれば特別養護老人ホームに入りたいと、名古屋の、とある地元の区役所に出向かれた。そこで「定員の 30 倍の数の方が今、登録されています。平均で 10 年以上、お待ちされます。期待しないでください。」と市役所の方に言われた。「公的な介護施設はそのような状況だったら無理だろう」と、彼女は医療の仕事をしてきていたので早々に諦めて、有料老人ホームを探そうと、自分の住んでいる名古屋市内で探した。6万8千円で見つかるころはなく、自分の持っている貯金を「3年生きて、0円使える、5年なら・・・と月に使える貯金額を計算して、一生懸命貯金を取り崩して、有料老人ホームを探し続けた。最終的に「12 万円までなら何とか出せるだろう」ということで、見学に行く時に「無理に勧誘されたら怖いからと誘われて一緒に行ったが、名古屋といっても山沿いの山間部の市内から車で3時間半かかるころ。月 10 万8千円で、4畳半に押し入れが半間付いて、朝晩付き、昼は自炊しても良いという、お世辞にもきれいとは言えないところ。彼女は、「体が動くまで自分の家で頑張ると、その見学の帰り道に言われた。「私の財産では入る施設も探せない。これでは孤独死しても仕方がないね」とおっしゃられた。でも、1人暮らしができなくなったらどこかを探さないので、「その時は一緒に探します」と言って、その時は別れた。そんなに簡単でないという状況が今も続いています。その後、彼女は3年前に癌を発症したと映像にもありましたが、癌が再発した時は膀胱がんの末期でした。「すぐに厳しい抗がん剤の治療が必要」と言われて入院しないといけなくなり、国立の大きな病院ですが、「身元保証人のサインが入院契約書と治療の同意書に必要だと言われましたが、その時彼女にはサインをしてくれる人がいなかった。たまたま取材で知り合った私が一番近い間柄だったので、「サインをしてもらえないか」と連絡があった。私は彼女の真面目な人柄も、貯金がちゃんとあることも知っていたし、彼女が医療従事者で、医療知識のある中で自身で治療を決断したことも知っていたので、一

も二もなくサインをした。でもそのサインは認められなかった。病院で、「血縁者のサイン以外は大変だと言われた。「彼女は癌なので、何とかここで治療をしないと困る」と詰め寄ると、その時に病院は、「治療しないで病院を放り出すのではない、身元保証を持たない患者さんが増えているので、うちではこんなサービスをしている」とパンフレットを渡したそう。そこには「身元保証人代行サービス」と書いてあった。彼女はその内線番号に電話をして、その2箇所の欄にサインをしてもらったが、身元保証人代行サービスからは「こんにちは」という挨拶くらいしかなかったそう。後でその話を聞いて、「私の方がよっぽど彼女のことを知っている」と思った。その代行サービス会社の人は、私のサインに二重線を引いてゴム印を押したが、ゴム印1つにつき、2万円を取られた。子どもや家族が居ても、入院の際に保証人がいない場合もある。命にかかわる現場でまだ身元保証人制度に固執することに、腹が立った。身元保証人制度は、病院の命にかかわる契約だけでなく、老人ホーム入所にも必要。

三菱銀行の男性を映像でご紹介した。彼は、老人ホームに入るときに保証人がないことがきっかけで、NPO に入会。よく考えると、老人ホームに入所する方は、頼れる人・身の回りの世話をする人がいないのであって。入所する時の入所の条件として、身元保証人を求めることに私は違和感を覚えた。家の賃貸借契約にも身元保証人欄がある。大手の不動産チェーン、エイブル、ミニミニなどは、提携する身元保証人株式会社がある。若い人も含め 30 代でも、親御さんも年金が少なく頼れない人がいる。身元保証人になってくれる親族を持たない人がたくさんいる。身元保証人会社を利用して家賃の賃貸借契約を結んでいる人は、大手だけで百数十万人を越えている。それでも相変わらず、家族が福祉の単位である時代を引きずっている。社会保障の土台になっている現実についてはニュースの特集などで訴えているが、これから先も、問題を発信し続けたいといけなさと感じている。

社会保障の土台について言えば、身元保証人制度と併せて、もう一つ問題になっているのは「きずなの会」の多くの方が言われた「迷惑をかけたくない」だと思う。私たちは、「迷惑をかけたくない」という台詞を聞いてから、今、家で1人暮らしをしている高齢の方で、何らかの手助けが必要にもかかわらず、医療や介護のサービスを受けていない人、我慢している人が、数多くいらっしゃるのではないかと感じた。今紹介した番組の半年後に、全国一斉調査をした。漠然と「手助けの無い人」では、難しいと思い、調査の対象は高齢者の見回りの拠点となっている、全国に 4800 箇所、各中学校区に1つずつある地域包括支援センター宛に行った。重度の認知症で自分のことがわからず、生活能力が完全に失われているのに、一切の介護・医療サービスを受けていない方が、把握しているだけでどれだけいるかを 4800 のセンターに調査した。「地域包括支援センターは限られた人員でやっていて、全ての高齢者を見守っているわけではない、隣人などの通報でわかっているだけの件数というお断り付きの回答だったが、それだけで、2010 年7月で、5万5千人おられた。どういう方が、「重度の認知症でも介護サービスを受けていない人か」を懇意にしているセンター長に何件か案内してもらった。

お1人は、木賃アパートに1人暮らしの男性。冬なのにパンツ一丁裸同然の格好で、部屋で過ごされている。万年床には、その地域包括支援センターの人が何日か前に届けたであろうお弁当が手づかみで食べた後があり、ネズミが大運動会をしている状態。私はそのセンター長を激しく叱責した。「この状況がわかっていて、どうして何もしないのか」と。そこに、身元保証人制度と、もうひとつ大きな問題があった。介護保険制度は、申請主義。申し込まないとサービスが発生しない。でも、その人は自分の名前も書けず、申し込み能力を失っている。「この方は、介護サービスが必要でも、このまま放置されるのか」と聞いた。「一応、例外規定はあるが、本当に代わりに申し込む家族が居ないかどうか調査して、いないとわかった時点で、地元の首長を後見人の形で介護保険の申請を行うという、手続を段階的に行わないといけな。手続に半年以上かかることもある。我々も一生懸命やっているが、手が回らない部分もあり、お弁当を

届けるのが精一杯です。」とセンター長は言われた。その時も違和感を覚えた。ギリギリの状態まで歯を食いしばり、「人様に迷惑をかけてはいけない」とお1人で我慢して暮らしてきたと思うのに、最終的に認知症が進み、このような状況になったときに、我々が手助けをしようにも制度が追いついていないことに、非常にモヤモヤしたものを感じ、その現場を後にしたことを覚えている。こういう状況がありますが、かといって、こういう状況に誰もが手をこまねているわけではない。

●様々な取り組み

良い悪いは別にして、大阪の中心市街地に近い地区で、低所得層、在日の人も多いし、木造の古いアパートも多い地域取材した。高齢者の1人暮らしも多い地区で、地域包括支援センターと連携して見守りをしているところがあり、ヒントを与えてくれる出会いがあった。その地域にいる大阪のおばちゃん、というか、肩書きは、「訪問看護センターのセンター長の女性で、61歳になる人。その方が肝っ玉かあちゃん、地域のお年寄りの面倒を見られている。訪問看護センターが入っているのがマンションの1階部分。その上の空き家に、自分が保証人になる形で、何人もの高齢者の方を住まわせている。その地区では、申請主義とかは関係ない。顔見知りのおじいちゃん、おばあちゃんなので、そういった状況になったら、そのお母さんが全部書類を書いちゃう。私に「早く取材しなさい」と言いながら、書いている。「いちおう決まりは違います」とおずおずと言ったら、「介護保険と憲法はどっちが偉い？」と聞くので、「憲法が偉い」と言った。「今やっている、この人をこのまま放置することは人権違反じゃないですか」と言って代筆していた。その人が書類を書いていることは脱法に当たりますので、番組で紹介することは躊躇したが、でも、この時代に欠けていることが何かについて勉強した。彼女の話で印象的だったのは、「家族、地域が機能しない、企業福祉が力を失っていけば、新しい家族を新しいところで作っていくしかない。私は、皆のお母さんでいい」ということ、そういう考え方の人。そのお母さんのところに、すべての情報が届く。ヤクルトの配達のおばさんも、異常を見つけると、そのお母さんに伝える。地域包括支援センターの人が見守りで異常を感じても、お母さんに伝える。配食センターのお弁当の配達業者までもが、異常を察知すると、そのお母さんに連絡する。お母さんが、地域のネットワークのハブ機能になっている。温かい鎖でつながれている。単身者が多く、単身高齢者、弱者が多い地域にもかかわらず、孤立死が少ない。地域の形となる、目に見えないところでの取り組みだが、彼女の日常の取り組みでいろいろなことを学んだ。このような取り組みを、我々が無縁社会のプロジェクトを2年続けている中で、「こういうことをやっているよ、あんなことをやっているよ」とあちこちで取材した。その中のいくつかを今までに紹介した。そして、その中で反響が大きかったものを紹介させていただく。先ほど、「きずなの会」に登録している会員の男性を紹介しましたが、高度成長期を支えてきた層、終身雇用世代、午前様まで働いていた猛烈サラリーマン。定年退職とともに仕事から放り出されて地域に行くけれども、隣近所の顔を知らない人が多い中で、特に男性が孤立化しやすい。その状況を変えようとした試みを紹介する。

全国に77万世帯の団地群を抱えている、UR住宅都市整備公団の試み。昭和30～40年代初頭に作られ団地全体が高齢化している中で、入居者も高齢化している。URの団地だけで、年間1千万人くらいの孤立死があり、その6～7割は男性。それをURは危惧していて、「男性の孤立死をなくそう」と、ある東京の北部の団地群で実験的に試みをした。定年退職したばかりの男性を集めて、団地の孤立死防止活動に一役買っていただく試み。非常に世帯数の多い団地なので、定年退職したばかりの人、20～30人が、すぐに集まった。URが指導する形で、会合をする。会社を退職して時間をもてあまして人が多いので、時間通りに会合が開かれる。でも、「何かやりましょうか、こういうことをやりましょうか」とURの人が熱心に言って

も活動に熱を帯びてこない。「良いですね」というばかり。そこで、参加者に名刺を配った。かつてのお仕事の種類と、見守りネットワークで任せられた仕事の種類を書いて、全て部長職以上にした名刺を配ったそう。例えば、「孤立死防止1号棟見守り副部長」とか「ゴミ捨て場見回り課長」とか、みんな部長や課長にした。その名刺を配ったとたん、会議室で名刺交換が始まった。URの方は、「ああ、これだ」と手応えを感じたそう。

面白いエピソードでもありますが、組織で重責を任された人には、役割を任せられるということが活動に向かう大きなエンジンとなった。その後、その活動は熱を帯びていって、例えばゴミ捨て隊長ですが、「週に4回もゴミ捨てがあるのだからこれをうまく使って見守りをしよう。たとえば中学生に500円でお年寄りの家にゴミをとりにいってもらおう、すると孤立死を防げるのではないかなど。植栽部長は「みんなが出てきてくれたその時に、お茶を飲む会合を開こう」など、あつという間に熱を帯びてきた。孤立死が多かった団地で、まだゼロにはなっていないが3分の1くらいに減った。取り組みから感じたのは、これからの地域での見守りやつながりの輪になるのは、「見守る」「見守られる」の区別無く、「高齢者」や「現役」というのは関係なく、地域では現役として役割を担うことがあっても良いと教えられた。私が会ったURの活動に関わっている方は、「見守られる側にいつかなるかもしれないが、今は見守る側にいることに誇りを感じる」と言われた。逆に、今、見守る側になっているから、見守られる側に素直に移行できるかもしれないと、感じた。

こうした取り組みが、SOSを発せない地域の閉鎖的な感じや、繋がりの中でも遠慮せざるを得ないということを超えていく力になるのではと感じた。もう1つ、視聴者からNHKに届いた反響で1番大きかった取り組みを最後に紹介する。NPOを生前契約して、火葬、埋葬代を頼む契約をしている会員の方から「こういうことを始めた」とお便りをもらって取材を始めた。神戸市の駅前の40階建て高層マンションに住んでいる当時74歳の男性で、お1人暮らしの方。63歳で会社の重役までされて、仕事一本槍でやってきて「退職してこれから」という時に、退職して数ヶ月で奥様に末期癌が見つかり、自分の退職後の身の振り方を考える間もなく奥様を看取った人。その方が言われたのは、「最初は洗濯物をどこにしまうのかも分からない。自分の着替えがどこにあるのか、家のものがどこにあるかわからない」と。仕事以外は全て奥さん任せで生きてきた方。奥様を亡くされ老後の生活に入って、奥様を亡くして3回忌くらいの時にふと、今月人と喋っていないことに気づかれた。「人間と全く喋っていない、これはまずい、このままでは自分はどうかなってしまう」と思って、自分にノルマを課したそう。歩いて15分くらいかかるところに下町のアーケード商店街があり、対面販売式の商店があった。「大根1本ください」とか「コロッケください」など言わないと買えない。コンビニのように黙って買って帰るところではなく、対話が必要なところ。そこに行く、そこに毎日通うことを自分に課した。毎日注文に行くうちにお総菜屋さん顔に覚えられて、下町なのでみんな気が優しくて、「1人暮らしなの、おまけするわよ」、そのぐらいの会話でも、人と会話をするのが楽しいと思い始めた頃、マンションである事件が起きた。隣の家で救急車が来た。高層マンションなのでエレベーターを使って下ろしたいが、エレベーターに担架が入らなくて大騒ぎ。隣の人が退院してきた後に、「その時はご迷惑をかけました」とご挨拶に見えたそう。その時初めて、隣の人がどんな人かを知った。その女性が、自分と同じように高齢で同じように伴侶を亡くして1人暮らしだと挨拶に来られて初めて知った。その女性はお礼に手作りの人参ケーキをもってこられた。その時、「実は、生前奥様と親しくお付き合いしていて、毎日のお昼を一緒にしていました。それ以来、ご無沙汰してしまっていますが、これは奥様にほめてもらった人参ケーキです。」と挨拶された。男性はそれを泣きながら食べたそう。奥様が亡き後、1人で暮らしてきたことにいたたまれなくなりながら。人参ケーキを食べながら、「奥様が遺してくれた縁だ」と感じて、その方に思い切って相談して、「お互いに1人で不安な身です、お互いにとってできることをしませんか」と言って、人形リレーを始めたそう。男性は起きれば新聞を取り込みます。その時に、ドアのノブに人形をぶら下げ

る。昼間、女性が出かけるときに自分の家のノブにぶら下げる。男性が夕刊を取り込むときに、また人形をかける、そういう人形リレーを始めた。その男性は、奥様を亡くしてから、心臓が悪いこともあって、一切晩酌をやめていたが、「晩酌が美味くなった」そう手紙に書かれていた。それを読んで、温かいものが胸に広がって来た。「自分が生きているよ」「今日も、私頑張っているよ」たった1人でも受け止めてくれる人がいれば、安心していきいけるんだと男性の手紙から教えていただいた。その番組は短いものでしたが、視聴者から、同じような意見がたくさんありました。地域の先頭に立って、地域で繋がりを作ろうという大それたことは自分にはできないけど、「近くにいるたった1人の誰かとなら繋がれるかもしれない」、そういうお便り。私達プロジェクトのメンバーは、嬉しい思いになった。

●最後に

こうして取材や、情報を発信し続けている中で、「これなら自分にできる」というものを見つけて、自分も動く気持ちになることが大事。これからも、情報発信を続けていく。今日もそういう人権問題、福祉関係に熱心な方もご来場だと思う。NHK スペシャルには、ご意見を受け付けるホームページを常設している。「こういう取り組みをして、こんな効果があるよ、こんな許せないビジネスがあるよ」など、そういうご意見をぜひ、お寄せいただきたい。

「無縁社会」、「身元保証人制度」にしても、「申請主義」にしても、社会保障の制度の根幹から改革することが大事だが、政局の混乱の中で抜本的な改革にどれくらい時間がかかるか読み切れない状態。「公的な力には頼らずにできることを自分達の地域で搜してやっていく」。それを私たちは応援したいと思っているので、ぜひそういう取り組みがあれば教えていただきたい。最後に、今年、放送は来年ですが、次に無縁社会のプロジェクトが予定している番組についてお知らせ。放送は大きな事件がなければ、1月20日日曜日の予定。無縁社会がさらに加速して、高齢者にとって過酷な老後が待ち受けていることを告発するとともに、それにどう向き合えばいいのかを含めて放送する。具体的には、1人暮らしの高齢者が、500万人を突破すると伝えたが、いつまでも1人暮らしはできない。人の支えが必要になり受け皿が必要になっても、1人では暮らせなくなると、自治体によっていろいろな所に斡旋される。その斡旋先が福祉施設なら良いが、それが無いために、臨時の宿泊施設、ドヤのようなところをたらい回しをされながら、病院や福祉施設のベッドの空きを待つという命に関わる深刻な事態に陥っている。超高齢化社会の問題を取り上げるので、そちらの番組にもご意見をお願いしたい。皆さまの人権活動に、今日のお話がお役にたてばと思う。